童話

www.columnland.net

ももたろうてきものがたり

桃太郎的物語

昔々、鬼が住んでいると言われている鬼ヶ島に一人の男が流れ着きました。

男が目を覚ますと、そこには大きな赤い鬼が立っていました。

「どうか命だけはお助けください。」

男がそう言うと、鬼は黙って男を洞穴へ連れて行きました。

次の日の朝、鬼が初めて口を開きました。

「そこに船がある。それで帰るがよい。」

男は深々と頭を下げ、船に乗りました。

無事に家へ帰ることができた男は、あの鬼になんとしても恩返しがしたいと考えました。

そこで男は家にあった財宝を鬼ヶ島へ持っていき、また戻ったのでした。

しかし困ったことに、その財宝は一家のものであったために騒ぎになってしまいました。

焦った男はとっさにこう言ってしまいました。

「鬼に取られてしまったのです。」

その後の世の、あるところに、お爺さんとお婆さんが住んでいました。

お爺さんは山へ芝刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。

お婆さんが川で洗濯をしていると、どんぶらこ、どんぶらこと、大きな桃が流れてきました。

「おや、これは良いおみやげになるわ。」

お婆さんは大きな桃を拾い上げて、家に持ち帰りました。

そして、お爺さんとお婆さんが桃を食べようと桃を切ってみると、なんと中から元気の良い男の赤ちゃんが飛び出してきました。

「これはきっと、神さまがくださったに違いない。」

子どものいなかったお爺さんとお婆さんは、大喜びです。

桃から生まれた男の子を、お爺さんとお婆さんは桃太郎と名付けました。

桃太郎はすくすく育って、やがて強い男の子になりました。

そしてある日、桃太郎が言いました。

「ぼく、鬼ヶ島へ行って、悪い鬼を退治します。」

そう言うと、お婆さんにきび団子を作ってもらって、鬼ヶ島へ出かけました。

旅の途中で犬、猿、雉に出会った桃太郎は、そのきび団子で三匹を餌付けして鬼ヶ島へ連れていくことにしました。

こうして、犬、猿、雉の家来を手に入れた桃太郎は、ついに鬼ヶ島へやって来ました。

鬼ヶ島では、鬼たちが宝物やご馳走を並べて、酒盛りの真っ最中です

「あれは盗んできた宝に違いない。かかれ！」

しかし大きな体の鬼たちに敵うわけもなく、桃太郎たちは捕まってしまいました。

「どうか命だけはお助けください。」

家来たちがそう言いました。

ところが、桃太郎はこう言いました。

「鬼を退治しに行くと言って鬼ヶ島まで行ったというのに逃げ帰ったとなれば、もう恥ずかしくて生きていけません。さあ、殺してください。」

すると鬼は桃太郎をじっと見つめてこう言いました。

「そこにある宝を持って帰るがよい。鬼を倒した証拠となろう。」

桃太郎と犬と猿と雉は、深く感謝し、鬼からいただいた宝物を持って、家に帰りました。

お爺さんとお婆さんは、桃太郎の無事な姿を見て大喜びです。

そして三人は、宝物のおかげで幸せに暮らしましたとさ。

めでたし。めでたし。

三匹の悪魔

ある日、魔王は手下の三匹の悪魔に人間の殺害を命じました。
魔王はそれぞれに五人の人間を殺すようにと言いました。

一週間後、魔王は三匹の悪魔に結果を聞きました。
一匹目の悪魔は
「お聞きください。魔王さまは五人の人間を殺せという命令でしたが、私めは頑張って八人の人間を殺りました。」と報告しました。
魔王は言いました。
「よくやった。おまえには財宝と勲章を与えよう。これからも頼むぞ。」

二匹目の悪魔は、ぼろぼろになりながら言いました。
「すみません、魔王さま。最善は尽くしたのですが、三人しか殺せませんでした。」
魔王は
「仕方のない奴だな。しかしお前の努力に免じ、もう一度チャンスをやろう。まずは傷を癒してこい。」と言いました。

三匹目の悪魔は震えながら言いました。
「わわたくしは失敗した時の魔王さまの罰が恐ろしくて、殺人を実行できませんでした。」
魔王は憤怒して言いました。
「私はやる前からあきらめ、善を尽くさぬものが一番嫌いだ。まさにお前のようなものだな。お前は私の恐怖によって動けなかったために、私の逆鱗に触れることになった。万死に値する。」
三匹目の悪魔は地獄の苦しみを味わいながら、死んでいきました。

悪魔の価値というのは、結果ももちろんだが、どうあろうとしたかによって決まる。それは人間もまた然りである。

アカズキン・ザ・ワールド

話をしよう。あれは今から（ｒｙ。あるところに、見た目は小五、年齢は１８歳以上だからいろいろ安心の女の子がいた。なんでか知らないけど彼女は周りから「赤ずきんちゃん」と呼ばれていた。

ある日、遠くで一人暮らしをしていたおばあちゃんの具合が悪くなったそうである。母親のジョリーンの命令により、赤ずきん一人でお見舞いに行くことになった。常に中二の心を忘れず若干の反抗期にあった赤ずきんが、すんなりと自称１７歳（笑）のジョリーンの言うことを聞かなかったのは言うまでもなかった。３日間による決闘（デュエル）の末、赤ずきんのライフが０になることで決着がついたのだった。

赤ずきんは家を出発するときに思った。「ああ、フラグ立っちまったな。」と。自分の呼ばれ方とシチュからして、これから狼に襲われることはほぼ確実だと本能的に感じたのだ。

食われるという決死の覚悟をして、赤ずきんはテンプレ通りに森の中を歩いておばあちゃんの家を目指した。肉食動物のキラリとした目が彼女を見ているとも知らずに・・・。キラメキラリ（擬音）と・・・その動物は彼女を見ていた。

赤ずきんは、なぜか生まれつき邪悪な殺気を体全体で感じることができたが、なぜかその動物が物陰から彼女に襲いかかることに彼女は気付かなかった・・・。

赤ずきん「きゃん！」。動物「小五だと思って釣られたクマー」。赤ずきん「なん・・・だと・・・」

そう、その動物は角の生えた熊であった。熊の名前は「ユウギ」といった。森のくまさんユウギは、赤ずきんが落としたという十字架のロザリオを拾ってくれたらしい。ユウギ「小五じゃないなら声かけなきゃよかったクマーｗｗｗ」。ユウギには殺気がなかったため赤ずきんは気付かなかったのだ。

赤ずきん「ありがとう。このロザリオがなければ私は自分を抑えられなくなる。」実際にはロザリオをはずしても何も起こらないのだが、中二の彼女にはそれが理解できない。ユウギもなんとなく中二っぷりを察した。

なんだかんだで、そのあと特にイベントは発生しなかった。一人と一匹はそのままおばあちゃんのうちに着き、おばあちゃんはユウギを見たショックで具合が治ってしまった。やったね。

めでたしめでたし。

おばあちゃんが実は魔王というのはまた別のお話である。

【シンデレラ】

昔々、とても美しく、とても優しい娘がいました。

その娘は、お母さんが嫌いでした。だから、お父さんの愛人と手を組んで、お母さんの首を衣装箱の蓋でへし折ってしまいました。その後、お父さんはその愛人と再婚しました。そして、新しいお母さんと二人のお姉さんができました。自分の娘の方がかわいいので、新しいお母さんは娘を裏切り、辛い仕事をみんな娘に押しつけました。

それに娘の着る服はボロボロのつぎ当てだらけです。お風呂に入る事も許してもらえず、娘の頭にはいつも釜戸の灰が付いていました。そこで三人は娘の事を、『灰をかぶっている』と言う意味のシンデレラと呼んだのです。

そんなある日、お父さんが旅行中にお姉さん達にはお土産の約束をしますが、シンデレラはただ妖精の鳩がくれる物が欲しいと答えました。その後、お父さんが妖精から授かったナツメの木の苗を土産として与えました。シンデレラはその苗を大切に育てました。しかし、その木はナツメの木ではなく魔法の木でした。その木のおかげで新しいお母さんから与えられた辛い仕事も簡単に済ませることができました。

ある日の事、お城の王子様がお嫁さん選びの舞踏会を開きました。もしかしたら、王子様のお嫁さんになれるかもしれないという期待を膨らませ、二人のお姉さんたちとお母さんは、はしゃいでいました。

そんなお姉さんたちの仕度を手伝ったシンデレラは、お姉さんたちを送り出しました。それからシンデレラは自分だけ行けないので、悲しくなって泣き出しました。でも、シンデレラのボロボロの服では、舞踏会どころかお城に入る事も許されません。

だから、シンデレラはいつものように魔法の木にお願いして奇麗な洋服を出してくれるように頼みました。すると、小鳥がシンデレラに美しいドレスとガラスの靴を出してくれました。それを着てシンデレラはお城に向かいました。

さて、お城の大広間にシンデレラが現れると、王子様が、シンデレラの前に進み出て、踊りに誘いました。王子はひとときも、シンデレラの手を離しません。

シンデレラは夜の遅い時間になったので家に帰ろうとしました。シンデレラは丁寧におじぎをすると、急いで大広間を出て行きました。ですが、慌てた拍子にガラスの靴が階段にひっかかって、ガラスの靴が脱げてしまいました。ガラスの靴を取りに戻れば、王子様に捕まって帰れなくなるのでシンデレラは急いで家へ帰り、美しいドレスを魔法の木に返しました。シンデレラの後を追ってきた王子様は、落ちていたガラスの靴を拾って、その靴の持ち主と結婚すると決意しました。

次の日から、お城の使いが国中を駆け回り、手がかりのガラスの靴が足にぴったり合う女の人を探しました。お城の使いの者は、シンデレラの家にもやって来ました。お母さんは無理にでも娘たちに靴を履かせようとしました。一人目のお姉さんたちは足の指が長くてガラスの靴を履くことができませんでした。だから、お母さんは娘にナイフを渡して指を切らせました。お城の使いの者はこの娘が持ち主だと思い、連れて帰ろうとしました。しかし、小鳥たちがやってきて、血が足から噴き出していることと、本当に探している娘はまだあの家の中にいるということを教えてくれました。そこでもう一人のお姉さんにもガラスの靴を履かせましたが踵が大きくて入りませんでした。だから、お母さんは娘にナイフを渡して、踵を切って無理やり履かせました。お城の使いの者は今度こそこの娘が探していた娘だと思い連れて帰るところでまた、小鳥に血が足から噴き出していることと、本当に探している娘はまだあの家の中にいるということも教えてもらいました。そこで、お城の使いの者は家の中にほかの娘がいないか探しました。そして、シンデレラを見つけ、靴を履かせてみました。すると、サイズはぴったり合いました。お城の使いの者はその娘が本当の持ち主であると確信しました。

それからシンデレラは王子様と結婚式を開きました。お姉さん達はシンデレラに幸せを分けてもらおうとシンデレラの両脇に座りました。しかし、シンデレラの両肩に止まった小鳥たちがお姉さん達の目玉をとってしまいました。

ももの おはなし

むかしむかし　あるところに　おじいさんと　おばあさんが
すんでいました

あるひ　おじいさんは　やまへ　しばかりに　おばあさんは　かわへ
せんたくしに　いきました

おばあさんが　かわで　せんたくしていると　かわの　じょうりゅう
から　おおきな　ももが　ながれてきました

どんぶらこ…どんぶらこ…どんぶらこ

そのかず　なんと　3つ　です

おばあさんは　すっかり　こまってしまいました
おばあさんには　てが　2つしか　ありません
いちどに　3つ　もって　かえれないかしら？

しかし　さすがは　おばあさん　すぐに　ひらめきました

それが　おてだまの　はじまりです。

いまでは　おてだま3つ　できないと　およめに　いけない　という
いいまわしが　あるほど　まいにちの　せいかつに　かかせませんね。

「だいじなものをなくしたむすめ」

あるところに意地悪な魔女がいました。魔女には美しい娘がいました。娘は重たい宝石をたくさんつけさせられ、外に出してもらうことなく、小さな塔の中で暮らしていました。

ある日外をぼんやりみていた娘は、塔から少し離れた森に人影をみつけました。いつも魔女が長い間出かけてしまっていて、ひとりさみしい思いをしていた娘は、注意をひこうと宝石を投げました。突然とんできた宝石に男は驚きました。男は娘の存在に気づき、こうして娘は話し相手をつくることができました。

あまりにも世間知らずな娘に、男は時々いらいらさせられましたが、お礼にといってくれる宝石がとても高価なものばかりなので、時々娘のところへたずねてやりました。男は遠い町で起きた出来事のお話をしてやりました。娘は人と話せることが嬉しくて、どんどん宝石を男にあげました。

そして娘のもっている宝石が最後のひとつぶになってしまった頃、男はもうここにはこないと娘にいいました。なにしろ家から遠いし、男は少なからず娘にうんざりしていたのです。娘はまたひとりぼっちになるのを恐れて、「魔女がとても大事にしている宝物があるの、わたしはそれが何なのかは知らないけれど、きっと素敵なものに違いないわ」といいました。男は了解し、宝物が素晴らしいものであればこれからも毎日きてやるといいました。娘は魔女が大事にしている箱を男にわたしました。男はわくわくしながら箱を開けましたが、そこには何もはいっていませんでした。男は怒って帰ってしまい、それからもう二度とやってきませんでした。

娘はもう寂しさを感じることなく、静かに暮らしました。　　おわり

ウサギとカメ

森にウサギとカメがいました。彼らはそりが合わなく互いに嫌っていました。ある時ウサギは、カメに対し山の頂上まで競争しようと持ちかけました。むろん、カメは足が遅いことをウサギは知っていました。この競争で圧倒的に勝ち、カメに対して優位な立場に立とうと考えたのです。

（フッ。もしカメが承諾すれば、この試合は俺の勝ちに決まっている。しかし、奴がこの試合を断っても俺はカメは臆病者だ、と森中に言いふらす。どっちにしろ、カメより俺の方が偉いと森中に知らしめることができる。完璧だな…。）

カメは、初めはこんな勝ち目のない勝負は断るつもりでした。しかし、カメは考えました。

（待てよ。普通に戦ったらあいつには勝てない。けれど、何か細工をすれば…、勝ち目は十分にある。しかも、森の皆もこの勝負はウサギの方が有利だと思うだろう。その状況下で俺が勝てば、ウサギの奴を二度と立ち直れないくらいに叩きのめすことができるのではないか？　これは逆にチャンスなのかもしれない…。）

試合当日、カメはウサギの飲み物に睡眠薬を混入。しかも、この睡眠薬は眠らせるだけでなく、神経に作用し体を硬直させてしまう強力なものだったのです。

（さらに俺は万が一、薬が効かなかった時のために、道の途中に落とし穴まで掘った。これで俺の勝ちだな。フフフ…。）

ついにレースが始まりました。森の動物たちも皆見に来ていました。

（馬鹿なカメだな。負けると知っていながらさらしものにされに来るなんて。ほら、あっという間にこの差だ。余裕だな、この試合は…、あれ？　ちょっと体が重いし、なんか眠く…。）

（よし！　ウサギの奴、まんまと引っ掛かった！　あの走り出した瞬間の得意そうな顔といったら！　これでウサギの奴は俺に対して頭が上がらなくなるな…。それにしても…、うわっ！）

カメは勝利を確信し有頂天になっていたせいか、自分の作った落とし穴があったことを忘れ、それに落ちてしまいました。

数時間がたちました。

ウサギは、薬で神経が麻痺し、体が動かせずそのまま餓死しました。
カメは、落とし穴の中から出られなくなり、そのまま餓死しました。

森の動物たちが、誰ひとり彼らを助けに来なかったことに、彼らは死の直前になってやっと気づきました。

終

グリル童話

一、ことの発端

ここはとある飼育小屋。ここに一羽の鶏がいる。彼の名は「チキン」。臆病ものである。何をするにもビクビクしていて、人間様の皿の上に自分がいることを想像しただけで気を失うこともある。

そんな彼に最悪の事態がおとずれた。彼は人の手により首根っこをつかまれ、どこかに連行されてしまった。チキンは餌の時間がきたのだなと思っていたが、彼がこれから処刑台にあがるということはまだこの時は知る由もない。

二、地獄の時間

チキンは食肉加工場にたどり着いた、否、たどり着かされたというべきであろうか。やはりチキンは臆病ものであるが故にその場所に漂う異様な殺気に敏感に反応した。彼は必死に暴れまわったが、得体のしれない注射器を当てられ、そのまま永遠に目が覚めることはなかった。

そしてついに解体という名の人間様による処刑が始まった。まず血を抜きとった刃先を、**（童話の定義から逸脱しているため削除されました。）**

解体は終了し、チキンの原形はもうそこにはなかった。

三、人間の人間による人間のための犠牲

原形を失ったチキンは次に卸売市場というところに運び込まれた。加工場とは違い、殺気はなかったが、人間の欲望渦巻く金銭絡みがそこにはあった。チキン自体にはお金で買えない価値があるが人間様から相対的にみて価格を設定される。チキンには安値がつけられた。彼にとって屈辱的なことはそれにとどまらなかった。自分の将来の夢まで決定される。チキンの場合は工場に運び込まれてソルトやペッパーで味付けされ、容器に閉じ込められた。同期の仲間たちは冷凍唐揚げ、つくねなどになった。

味付けされたチキンはそこからローカルエリアなスーパーマーケットに運ばれ、店頭にてその無残な姿を人間たちの前で晒された。買い手がいるならまだしも、売れ残ってしまっては「３０％引き」などのようなレッテルを貼られて、終いには「消費期限切れ」となり、ゴミ箱に捨てられて無意味な死を遂げる。無事、チキンには買い手が見つかった。

四、二つのグリル

味付けチキンは買い手の家に到着して一時的に冷蔵庫に押し込められた。となりには第二の犠牲「さんま」がいた。二者は無言のまま、買い手が戻ってくるのを待った。

戻ってきた。二者はキッチンの舞台に上がり、さんまは魚焼きグリルの中に入っていった。一方でチキンはバーベキューグリルの上に乗せられ灼熱の地獄を味わった。地獄を味わったものを人間が味わうという構図はチキンにとって恨めしきれなかった。

グリルから出てきたチキンとさんまはこんがりと日焼けしており、ディッシュに盛られた。彼らは命をかけて今日人間様の生きる糧となったのだ。

なのできょうもたべものにかんしゃしていただきます

桃太郎は、桃じゃなきゃいけなかったのか？

「すいか太郎」

ある日、おばあさんが川で洗濯をしていると、上流から大きなすいかが流れてきました。
すいかは、その持ち前の丸さと中身の詰まった重さを生かして、驚異的なスピードで川を下っていったので、おばあさんは一言、「早っ」と言って、いつも通り洗濯を終えて家に帰りましたとさ。

「トマト太郎」

ある日、おばあさんが川で洗濯をしていると、上流から大きなトマトが流れてきました。
おばあさんがそのトマトを持って帰ると、おじいいさんが
「おお、トマトかーわしはトマトをそのままかじって食べるのが好きなんじゃ！」
と言って、丸ごと一個たいらげてしまいました。
後日、おじいさんは急に亡くなりました。死因は、内臓が、体内で子どものようなものが暴れまわったとしか考えられないほど破損していたことでしたが、なぜこんなことが起きたのかは未だに不明だとさ。

「りんご太郎」

ある日、おばあさんが川で洗濯をしていると、魔女が近寄ってきて
「お嬢さん、おいしいりんごはいらんかね。」と言っておばあさんにりんごを差し出しました。
おばあさんは、まぁおいしそうなりんごと言って、そのりんごを家に持って帰りました。
家に帰ってそのりんごの皮をむくと、なんと中から男の子の死体が出てきました。
びっくりしたおばあさんが警察を呼ぶと、調査によりそのりんごが毒りんごであることがわかり、魔女は連続毒りんご殺人事件の犯人として逮捕。おばあさんは無事助かったとさ。

「ぶどう太郎」

ある日、おばあさんが川で洗濯をしていると、上流から大きなぶどうが流れてきました。
家に帰って、ぶどうを食べようとして皮をむいたところ、中から元気な男の子が出てきました。
びっくりしたおじいさんとおばあさんはその男の子を『ぶどう太郎』と名付けました。
気を取り直して他の粒を食べようとすると、皮をむくたびにすべての粒から男の子が出てきたため、それらを『ぶどう二郎』、『ぶどう三郎』、…『ぶどうN郎』と名付けました。
ぶどう太郎たちはすくすくと大きくなり、やがて鬼が島の鬼の噂を耳にします。
これはいけないと思ったぶどう太郎たちは、犬、サル、キジの力を借りることなく、その圧倒的戦力で敵的有利に立ち、鬼を一網しました。鬼は
「そんなにいたっけ…」と一言残し、それ以降悪さをすることはなくなったとさ。めでたしめでたし。

結論

ぶどうでもギリいける。

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	桃太郎的物語	14 pt	1 位	0 sp
		桃太郎嵐が吹き荒れた今週。よって表紙から桃、入ります。 平和主義桃太郎。そう、鬼退治なんてヤボだよね。血の流れない展開が、ほっこりまったり。きちんとお話のツジツマも合っていて、ハートウォーミングなセッション・スタートでした。 けっこう手間もかかったと思いますが、総フリガナにしてあるところが、いかにも童話っぽくて◎。 王道王道、会心の仕上がりで首位ゲットです、おめでとう!!		
02	三匹の悪魔	7 pt	3 位	0 sp
		一転、殺伐主義へ。何人殺したかで試すなんて、そ、そ、そんな。 でもそれが悪魔さんのお仕事なのですね。ピリリと諷刺の効いた設定で人間の価値を逆照射、すとんと腑に落ちるまとまりでした。 おめでとうブロンズ・メダル！		
03	アカズキン・ザ・ワールド	3 pt	7 位	0 sp
		言い放ちましたね、「僕の敵は100万人コードです！」ふうん。 まあ知らなくても楽しめるようにきちんと作り込んでくださいな。 まさかのラスト１行は、続編の予告でしょうか。 ネタにウケた人たちのおかげか、イチオシフレーズ大賞です、おめでとう！ イチオシフレーズ：「小五だと思って釣られたクマー」×２「決闘（デュエル）」「おばあちゃんが実は魔王というのはまた別のお話である。」		
04	シンデレラ	0 pt	9 位	1 sp
		コワイコワイお姉さんたちへの復讐ばなし。イケないのはママハハであって、お姉さんたちじゃないのにね。そのブラックさは純真な子ども向けストーリーからは隠されてしまった元シンデレラに通じるところがあります。 いろいろ小道具をいじって、元ストーリーと付かず離れずの展開。力作だったけれど、もうちょい離れて奔放にストーリーを振り回したほうが、より楽しかったか。 特別賞：そのままで賞 from U班（そのままだから）		
05	ももものおはなし	2 pt	8 位	3 sp
		いやその、桃をお手玉にしたら、ずたぼろぐにゅぐにゅになって桃太郎も生まれないんじゃないかと思うんですが。食べ物をおもちゃにしちゃいけませんてば。 すっかりキャラクターが固定して最多特別賞です、おめでとう！ 風邪、治そう。		

		特別賞：短賞 from W班（読む人が楽。こんな短くできるなんて、すごい力量） ☆賞 from Y班（もう作者さんはこの人しかいないでしょう） It's賞 TIME! from Z班（作者に見せてほしい） イチオシフレーズ：「それが おてだまの はじまりです」×２		
06	だいじなものをなくしたむすめ	7 pt	3 位	2 sp
		だいじなもの、何だったんだろう。いつもながら、この作者さん、空白の余韻に惹かれますね。 心、なのかな。 特別賞：魔女空気で賞 from R班（実は魔女いないんじゃないの説） 今、魔女はどこで賞 from X班（最後に娘はどうなったのか？） イチオシフレーズ：「静かに暮らしました。 おわり」		
07	ウサギとカメ	6 pt	6 位	0 sp
		なんとシニカルな。冷たい冷たい森の仲間たち。 ムキになって競争したことの意味は何だったんだろう。命まで賭けるほどの名誉なんてどこにも存在しなかったのさ。 うわーん、子どもたちの夢を奪うなっっ。 おめでとうブロンズ・メダル！ その２。		
08	グリル童話	7 pt	3 位	2 sp
		む、これは童話の定義から逸脱してないか？ という疑問を吹っ飛ばすほどの楽しさです。チキン視点での各プロセスがありありと見えてきて、お気楽な人間への諷刺もほどよく効いて。 昼食前に読むのに好適品。 おめでとうブロンズ・メダル！ その３！ 特別賞：食育で賞 from S班（子供にぜひ読ませたい作品だから） 人肉賞 from T班（人を食べるのは止めましょう） イチオシフレーズ：「チキン自体にはお金で買えない価値がある」		
09	桃太郎は、桃じゃなきゃいけなかったのか？	14 pt	1 位	2 sp
		ラストはくだもの太郎シリーズ。桃太郎の「桃」にツッコムとは、ナイス・アイディア。 ぶどうでもギリいける、に爆笑爆笑大爆笑。 桃に始まって桃に終わった今週、桃がらみの覇者ふたりめです、首位おめでとう!!! ただいま２連覇中の由。次週に期待です。 特別賞：おじいいさん賞 from Q班（おじいいさん） 悪徳賞法 from V班（おばあさんに「お嬢さん」と話してるから） イチオシフレーズ：「そんなにいたっけ」「ぶどうでもギリいける」		